

最西端の孤島

与那国に住んでみる

与那国島の観光スポットの一つである海底遺跡は、島の南岸、新川鼻から百ほど沖合にある。二月十一日の午後四時、船腹から海底がのぞける観光船「ジャックス・ドルフィン号」に乗り、久部良港を出発、島に沿って東に向かうと、さっと二十分で目的地に着く。

海の底には、東西に二百七十、南北に百二十ほどにわたり、城壁のような巨石の群れが横たわる。高いところで二十六はある。階段やテラスのように見える岩のシャープな切り口を目的の当たりにすると、人間が手を加えた人工物に違いないと思えてくる。

観光船を操縦し、船内放送で海底遺跡の解説をしていた新郷喜八郎さん(60)が発見者といわれる。四日後の午前十一時、祖納集落で経営するホテル入船近くの自宅を訪ね、発見のいきさつなどについて聞いた。

母親が切り盛りする旅館の仕事を手助けするため、東京から島に戻ったのが三十年前。当初

謎の海底遺跡

特別編集委員 足立 則夫(60)

は潜水士の資格を生かし、港湾工事の際、海底の岩盤をダイナマイトで爆破する作業などに携わっていた。

一九八六年、観光客向けのダイビングサービスが始める。島の周辺で、ハンマーヘッドシャーク(シユモクサメ)に続くダイビングの対象を探しているときに「身の毛のよだつような思

巨石の文明都市があった?

いをした」。異様な光景が目の前に現れたからだ。それが海底遺跡だったのである。地元では、四十年ほど前から漁師の間では知られていた、とも言われるけれど、新郷さんの「発見」がきっかけで、テレビや新聞で報道され、一躍脚光を浴びることになった。

九二年には琉球大学の研究者も共同調査に加わり、海底の巨石群が一体何なのか、調べ始める。それを皮切りに、内外の研究者が潜水調査をしては、様々な説を唱える。神殿説や城壁説、水中墓説、石切り場説、さらには自然石説まで百家争鳴の感がある。

共同調査に加わってきた琉球大学名誉教授、木村政昭さん(67)は、炭素を使った年代測定によって大胆に説く。

「首里城に似た城と神殿を兼ねた巨石が、一千年から二千年前に起きた地滑りで、一瞬に海底に沈んだ。当時、与那国には高度に発達した文明都市があったのではないか」



「海底遺跡?自然の地形?」観光船の船腹から食い入るように海中をのぞく観光客の写真 中村豊

地元の新郷さんは、祖納集落の浦野墓地にある亀甲墓や、旧家に残る石盥なども合わせて考察し「巨石を暮らしている文化が、その昔、栄えていたのではないか」とみる。

欧米の研究者も到来するようになり、新たな問題も浮上している。石器状の石を拾ったり、遺跡の一部をハンマーで砕いたりして外国へ持ち帰る研究者やダイバーも出現している、と新郷さんは指摘する。

鬼虎(ウニトラ)は宮古島で生まれ、10歳で米1斗と引き換えに与那国に連れてこられる。腕力と知謀にたけ、手に余る存在になったことから、沖縄本島の尚真王が1522年に討伐の命を下した。同行の女神官がしびれ薬入りの酒を飲ませ、頭目らが退治し、首を塩漬けにして持ち帰った。(池間栄三著『与那国の歴史』)

与那国の伝説

していたのか。解き明かすための鍵を秘めた海底遺跡が、これ以上、盗掘されたり、破壊されたりするのは見るにしのびない。

んが理事長を務める非営利組織(NPO)海底遺跡研究会は二〇〇六年、沖縄県に埋蔵文化財として指定するよう届け出た。自然石説を支持する学者もいるためか、今のところ柵上げにはなっていない。

フランスの雑誌「科学と生命ノート」

# 与那国の海底遺跡に焦点

【久高泰子通信員】仏の隔月雑誌「科学と生命ノート」八月号は「日本の海底に埋もれて」と題して、与那国島の「海底遺跡」を紹介している。一九八六年、新島喜八郎さんによって発見された与那国島・新川鼻沖の海底にある建造物は人工的地形、あるいは自然の産物などと活発に議論されている。

## 独TVに続き仏で初

① フランス

一年ほど前、ドイツのテレビがこの「海底遺跡」ルポを放送したが、フランスのメディアはいまだこの海底遺跡物につ

いて取り上げていない。筆者リオネル・クロンソンさんはこの記事を書くために大変な努力と時間を要したという。調査するための資料などが地元フランスには皆

無に近く、「海底遺跡」研究の第一人者である木村政昭琉球大名誉教授（地質地球科学者）をはじめ、ドイツなど隣国の人類学者、考古学者、古代歴史家らの専門家たちと電話やメールで問い合わせ調査を進めた。読者の反響は今のところ、はつきりしないが、将来、記事に触発され、長寿沖縄と合わせて、フランスのメディアで取り上げられる可能性もあるという。

クロンソンさんはアジア、特に日本を専門とするフリージャーナリス。都会より素朴で自然に恵まれた土地取材している。これまでに、日本の「旅の手帖」に四国の村、またフランスの雑誌に日本の食文化を紹介するなど内容はバラエティーに富む。「科学と生命ノート」は数学、物理学、建築など古代世界の謎を科学面から追求する雑誌。



インタビューに答えるリオネル・クロンソンさん

|| パリ市のカフェ

海外 World 沖縄 Okinawa

ウチナー ワールド ネットワーク



【講師プロフィール】  
**山田 吉彦(やまだよしひこ)**  
 東海大学海洋学部准教授、海洋政策研究センター研究員  
 1962(昭和37)年千葉県生まれ。  
 学習院大学卒業、経済学博士。  
 金融機関を経て日本財団(日本船舶振興会)に勤務。  
 海上保安庁、現代船舶汽船等に在籍し、各方面で活躍。  
 著作に『日本の国境』『海賊、マラッカの海の中で』  
 野次郎で読む日本地図、『海のアレコレ』など。

吹浦 忠正  
 (ふきうらただまさ)  
 特定非営利活動法人  
 ユーラシア21研究所 理事長



佐倉 明広  
 (さくらあきひろ)  
 中京大学総合政策学部教授



盛 和春  
 (もりかずはる)  
 電通  
 プロジェクト・プロデュース局  
 シニアプロデューサー



真謝喜八郎  
 (まじゃきはちろう)  
 汽船エンタープライズ代表  
 与那国観光協会常務理事



上地 富夫  
 (うえちつねお)  
 与那国漁業協同組合長



松原さと子  
 (まつばらさとこ)  
 フリーアナウンサー  
 (進行役/コーディネーター)



上妻 毅  
 (こうづまたけし)  
 財団法人都市経済研究所 理事



【与那国島・海洋タウンミーティング2008】

「四面環海」= 四方を海に囲まれた日本。実は合計6,852の島々からなる島国です。古来、さまざまな海の恵みにあずかり、発展を遂げてきました。

一方、漁業資源・海底資源をめぐる国家間の対立や紛争、海洋環境の汚染、不審船等による海上犯罪など近年、「海」に関わる多種多様な問題も生じています。与那国においても、漂着ゴミの問題、台風・津波などの災害対策や海の安全確保は、ごく身近で、とても重大な問題です。

そうした中、昨年、新たな海洋立国の実現をめざす「海洋基本法」が成立しました。

「海に守られた日本から、海を守る日本への転換」と言われています。同時に、広大な日本の「海城」を支えている「離島」の大切さが、今、改めて問い直されています。

本「海洋タウンミーティング」では、日本最西端の国境離島から、「海とともに切り拓く、島と日本の豊かな未来」について、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

パネリストは多士済々。ぶっつけ本番。どんな会議になるか？ 一わかりませんが、和やかに、楽しい会議にしたいと思っています。どうぞお気軽にご参加下さい。

与那国島・海洋タウンミーティング2008

—海とともに切り拓く。島と日本の豊かな未来—

- ①基調講演「国境の島・与那国と海洋立国ニッポン」(講師:山田吉彦氏)
- ②パネルディスカッション(講師を含む8名のパネリスト)

日時: 2008年11月9日(日) 15:00~18:00

場所: 与那国町保健センター(入場無料)

主催: 財団法人都市経済研究所・与那国町

後援: 日本財団

協力: 与那国島びる会議・beatnik design

お問合せ先: 財団法人都市経済研究所「海洋タウンミーティング」事務局 電話: 03-3431-7011

